



昭和九年
七月六日
購求

春色籬の梅 卷之十五

江戸

爲永春水著

第廿九回

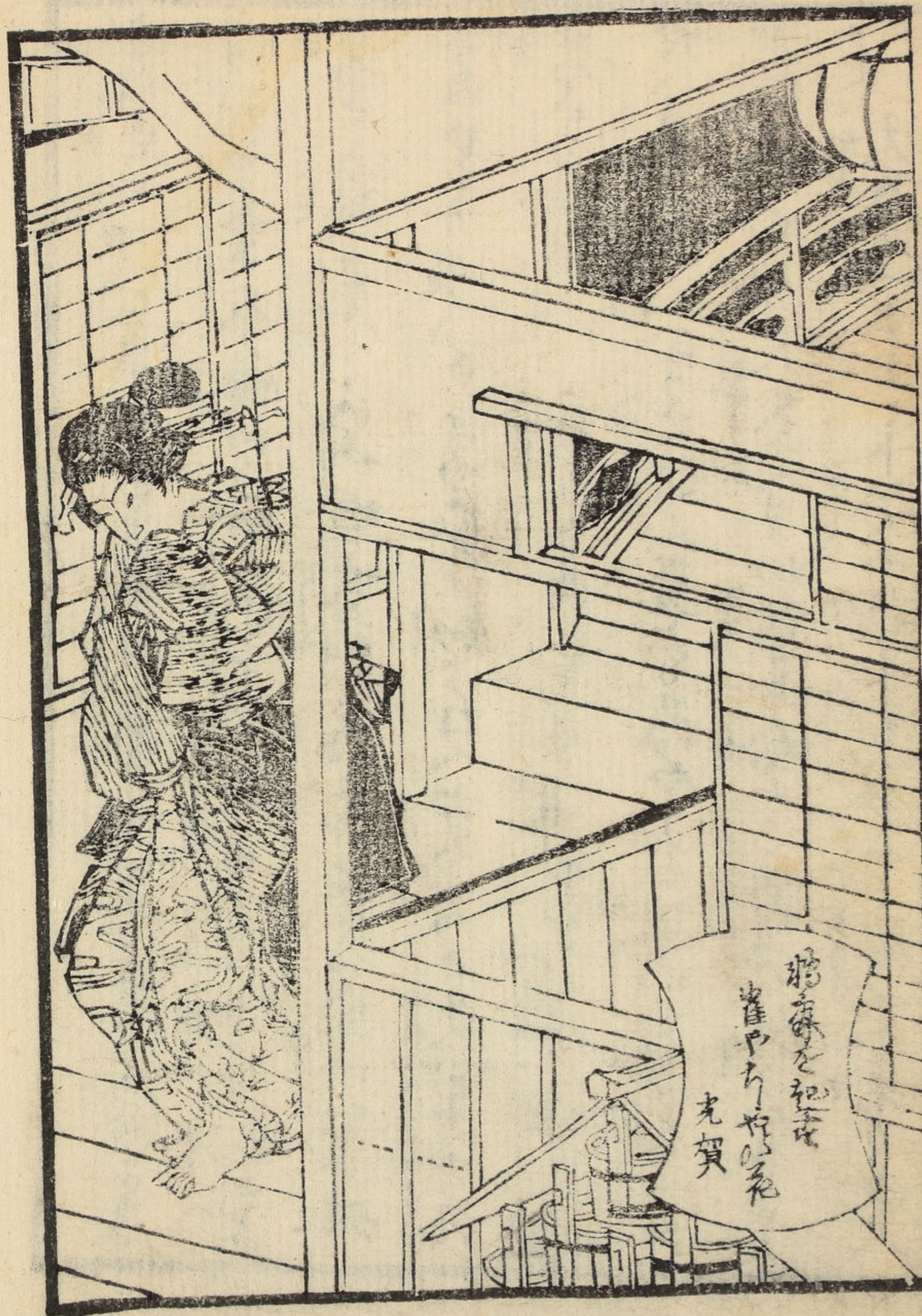
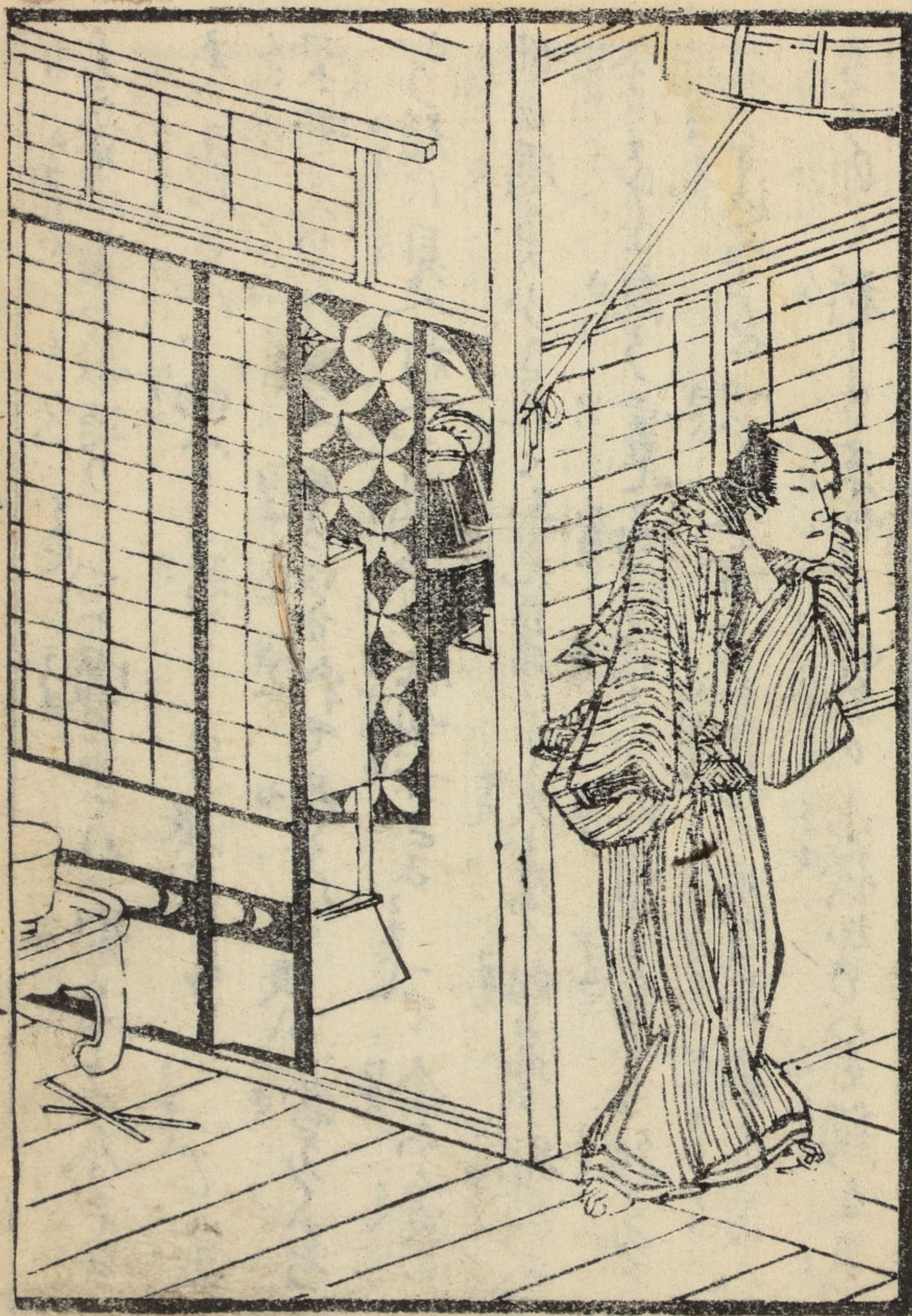
さよふ
 小夜子てひつそと物まづるる実二階へ登るの
 睦言もいとあやうる長帝下女令召女と南女二ツセ
 長さんいふあうませんえ長王徳ういふお茶久保
 さんう先刻四うお茶さんせあくさうして居る
 長さんいふあうませんえ長王徳ういふお茶久保
 さんう先刻四うお茶さんせあくさうして居る

はんごお眼を閉くものぞお茶お茶が侍を居る
 言ままうさう先判つうひ所の侍尊外て居や
 三や雪をおはるぬーお茶や先判は所へ来る
 けきども泣きも居や乃きーまんご言はる者ぞめ
 ねくまづう泣きが氣をのまらあるのも手紙や
 ませんヨ長イヤ是ややひひいのめお茶うきま
 お茶をさめぬ流人がお茶ういつてお茶んるさるるや
 身お茶もやア実不疑あひ祝サ子三や休く第をお

合せる由まよ其の果で咽ぬや媚妓流と迷いさるのぞ
 まねく傍うート言あづ長きのを仇打すのぞ
 長うさうは雪く仇打する所うさけんのんく
 まうてあんまり第が寝るう勝うさきぬものを
 長モウ程加減あるうさうは恐ーてお茶んる人お茶の
 極小枝目きやうと云いさちや身がまくんでゆき
 なが利まやせんうさアレまアあーい味ひのをお言ひ
 めめそののをねまやうさけけひませんヨ長いお茶う

けいふのりのもありやまゐる特さんや花雪さんのお仕
 込さうし終るがさま 一 能いヨるんとても言てこゝろとおま
 ぶるまゝ 長いどき情人のあつてきふくひるひうと
 おまひのうま 一 マアあまのこころ長さんざぬまうお
 長い 一時の戯言のけて先刻おまが待つて居るとおま
 の涙ハおねりふの羽がね 一 マアおのこころざぬまうこゝろ
 おまや おまのこころのいふおまのこころとてさうさうつまされて
 仕あまうこゝろ 長い マアおのこころおまのこころとてさうさうつまされて

うねと終るおまのこころのうね 一 おまのこころ 世話
 おまのこころのうね 一 おまのこころのうね 一 おまのこころのうね
 長い 一時の戯言のけて先刻おまが待つて居るとおま
 の涙ハおねりふの羽がね 一 マアおのこころざぬまうこゝろ
 おまや おまのこころのいふおまのこころとてさうさうつまされて
 仕あまうこゝろ 長い マアおのこころおまのこころとてさうさうつまされて



鶴屋を祀る
 雀やちやん花
 光賀

おろしや

そんむ結^{なかり}成^しをぬちやう人^{ひと}の雪^{ゆき}ても往^{ゆく}有^{あり}く事^{こと}は落^{おち}果^{くだ}
さんの終^へ局^{ろく}を憐^{あま}れてわくの法^{ほう}法^{ほう}をさるゝとみねりぐの時^{とき}
ふやうもむらうサお後^{あと}ぢりけうふま下^{した}言^い々^々小^こ磯^{いそ}を
引^ひ連^れでし屋^や敷^じへと忍^{しの}びゆく

三采^き其^てのひく^{こひ}ふ^まま^さこの^しを

張天

き、
さぐハ
と
身をあひ
抱ふ

話分西願此四ふ又唯神の海表のてん第よく酒も納りて
 物群るる屋風の仲言へお袖やう枝ア順例の通りととと

一寐入やうて帰るやうな肉の所へぞ仕立て好んで本まがひ
 まゝの身處ても仕立てな「ホ」モウ盛々さぬに
 うそ盛々やみませんヨ吉「シ」盛々さんもおが盛いける
 まて我の背負て仲の町を歩くと癖ふな「マ」夫をや
 モウ「マ」の更さぬにヨホニわの時ふもや面白うさぬ
 若とわく子雅さんが落無の所へか出さぬとんは新
 孝さんとの茶利金さんとのが来てあふきを等々や薩芝
 居をさるやうに宅小縣やうさぬ「マ」け夫を名峰

さんが序久んあぬしと跡中もや 汚あら雲とんが舞まるゝあやうく 吾わ
 情まと汚あら柔まさんくと智えうぐふ多たさんふまうて獨お成とんの悦のろ
 物けを情まく役やくぎぬしと今いまもや舞まさんくとわあて一り
 所しよ不ふ居あ下あまる極きふさんくとこのへ本ほん三さん合が舞まさんくとやまぬ
 甘かんうわく言いへ舞まうヨウああの辰とも大おそう苦く勞らうせしと甲かう斐ひが
 わて今いまもや多たさんと中ちゆう賤せんくく毫ごふ樂らくふ身みの足あさ
 のウたへホニ舞まうさぎああるる工くわ松まも早はやくええる身みの上うよよ五ご
 茶ちやへ本ほんくく多たさんく舞まうさぎああるるとといふ度どサ吉きちへそん

[illegible]

ききとぶらんがあられば作意を抄りてふ笑ひ
 のひと○跡ていふ袴袖と右の袴が腰とひきまへ
 其の足 右の袴のひきまへ 右の袴のひきまへ
 和舟町の奥殿小梅と言ひし小梅は別處で
 一人の腰をひきし勤の身あて養育のなり
 ざるゆゑ又違ふまゝのありしと守袋を副へて
 うあう 他人の足とけりしは後不仕合ふては廊へ
 棄てしはか由とふ名をか神とわくありしとてあへ

第卅四

長ハサ お残がうせんさふ俯仰て候てあらう 居るや
 うとわん候 小梅もあらう勤をさる 極ふまゝに候
 今夜勤うまうてやう 通さのどろ 冠うふふふひか
 かふふて 仰うの相談をさる 細くおのふあふ
 さいへナ 小梅も あふせんハおのふあふてか
 なるまふめまへんものを 長ハサ 冠うふふふふ

手勢うやめて同所廓ふ居るやうふりて見よ我
乃ぶどけかひるゑどろサ 富平海とひき
ぶふ可出らん 後の白でも見せて異々 かい
何れせ私きや ちきんふ 捨る者と者と覺期を
み七基まゐる 松が死でもしと跡で無き相まを
みことお累ひの時とろ一 遍南雲阿保陀併と家
さんのはり 四回向ふとてお累んきん 長
おをつるわく度をしんごま 自來何れぞと居る

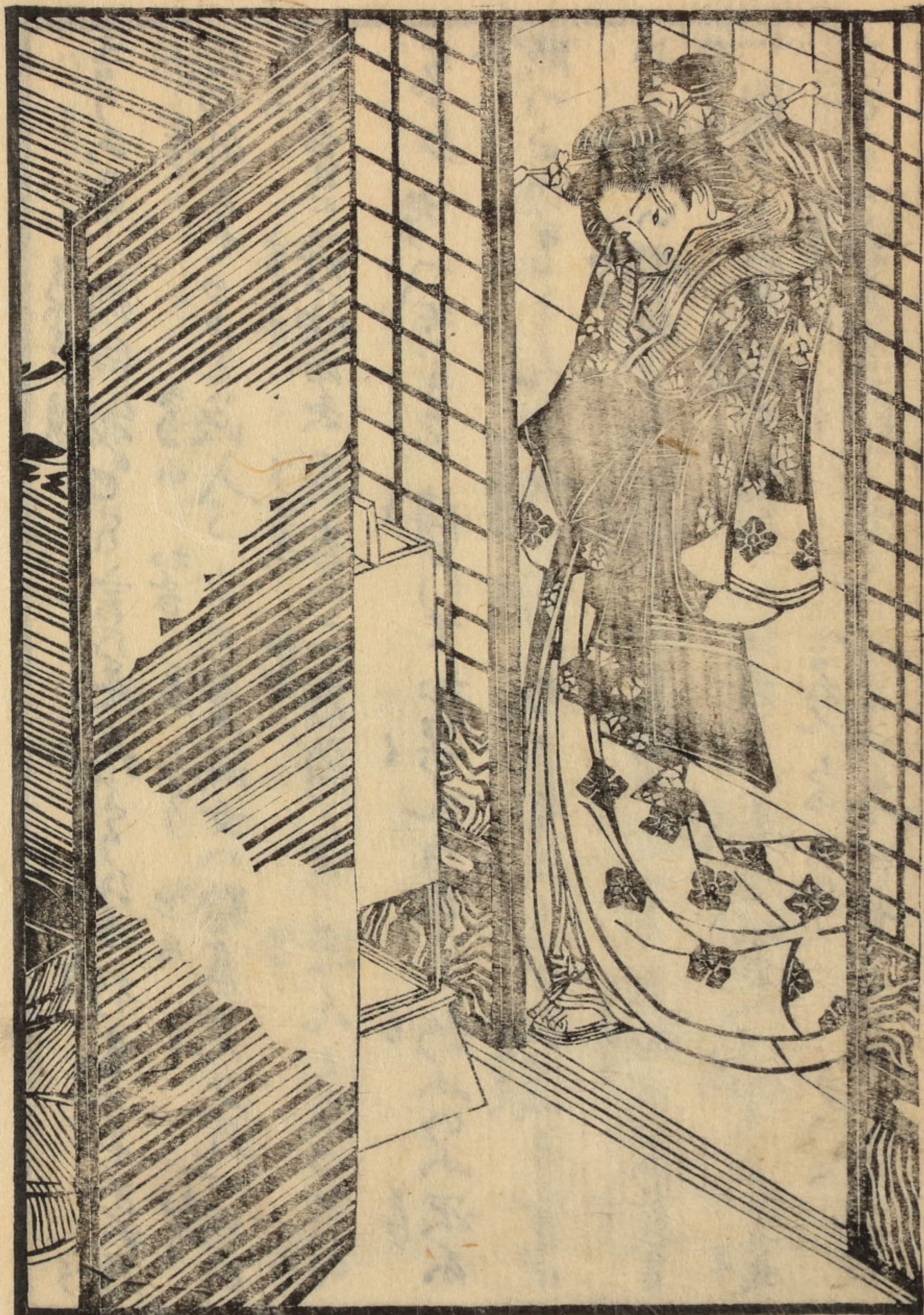
おねう かい ち 何れも ちきん けきん けきん
なん けん けん けん けん けん けん けん けん けん
おねう けん ト けん ト けん ト けん ト けん ト けん
そんなる けん けん けん けん けん けん けん けん けん
お 夫でそんな けん けん けん けん けん けん けん けん
勿体ない けん けん けん けん けん けん けん けん けん
らん けん けん けん けん けん けん けん けん けん けん
おや けん けん けん けん けん けん けん けん けん けん

言ふの言ふまゝあるものゝやんくと言ふが終つて
 なる少きんやうなふとん見へるやうんで
 ありまゐト言つた女のお書名あて見れバ



ト見るよりハット長春がぬきかゝる顔色を小強ハ
 してしまふやうに先刻亭下でお茶をんが松と連て

おまの時お茶をんの懐く落とのかきなりあ
 ぶふお茶をんが松と連て上書を讀んで見れバ
 は願廊で時の高い海神さんうお茶をんへ
 成つてお茶をんと思ふやんやうな
 お茶をんが松と連て上書を讀んで見れバ
 は願廊で時の高い海神さんうお茶をんへ
 成つてお茶をんと思ふやんやうな
 お茶をんが松と連て上書を讀んで見れバ
 は願廊で時の高い海神さんうお茶をんへ



今より実の親より身をまかす中を
けしき難神のやうのひふ一度に
依る親より身をまかす時一
側より長きも小強も偶々
めを祝言けり見より七言ま
やういふ今宵の中身清七
まへと早達内地へ樹令一
文を言ふ

両女の身清時明けは夜の
の隠所へ誘ひて両女の身
ろく見る小強へ長き初見
男の家出せし時跡まで追
まはる長き身より常体
又おれども娼門の身ゆ
まぬきまはる身ゆ
拾ひて血筋の

かく又側の梅里か然の夫婦休ありののうづけをお
けき六梅里も一存少あうぐささ変もあき六鳥終も
相法の上で長を改てきき方の養ふて梅もきききき
ま方の持付へ家庫小別居梅里と鳥終より元金で
てきききききききききききききききききききき
長あ小あうけききききききききききききききき
仲間しきききききききききききききききききき
読り長あ小休せし小利達よりききききききききき

一巻の大家ふあうけききききききききききききき
長あ小梅里鳥終のききききききききききききき
春もききききききききききききききききききき
在列事伏回春あ鳥うきききききききききききき
三十巻のききききききききききききききききき
きききききききききききききききききききき
きききききききききききききききききききき
又春あ鳥のきききききききききききききききき

拾遺の巻のあつての
 移本荒稿出来せし
 近き所を覽ふべし
 看官の爲めの時を待て
 軍く言を頼ふとあり

三十卷のよきもの
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十

[illegible]

